HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	速度考を中心としたバークリー哲学の再解釈［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	尾崎，有紀
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(理学)
Dissertation Number	甲第13138号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/69973
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuki_Ozaki_review.pdf，審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学　位　論　文　審　査　の　要　旨

博士の専攻分野の名称　博士（理　学）　氏　名　　尾　崎　有　紀

審査担当者	主査	教　授　松　王　政　浩
	副査	教　授　細　川　敏　幸
	副査	准教授　重　田　勝　介
	副査	准教授　佐　野　勝　彦（文学研究科）

学　位　論　文　題　名

速度考を中心としたバークリー哲学の再解釈

博士学位論文審査等の結果について（報告）

本研究は、実践的な科学哲学研究として、17-8 世紀のアイルランドの哲学者ジョージ・バークリーを新たに解釈し直す中で、現代物理学における重要な未解決問題への新たな視座を得ようとするものである。哲学史において、バークリー哲学は英国経験論にあって、物体の外在性を否定する観念論を唱えるというユニークな位置づけにあるが、他のロックやヒュームに比べて、その哲学的な意義についてはこれまでさほど大きな評価がなされてこなかった。著者はまず、バークリーの「感覚的要素から世界を構成する」という戦略が、「空間的距離の比で速度を定義する」という現代の時間空間関係説論者バーバーらの考え方をすでに準備する考え方であったことを、バークリーのテキストを丹念に読み解く中で明らかにした。こうした物理学的に興味深い視点がバークリー哲学に内包されていることは、これまで指摘されたことがなく（せいぜい、ポパーらの研究によって、バークリーが後のマッハに近い考え方を持っていたとされたにすぎない）、たいへん画期的なバークリーの再解釈として、この研究成果を評価することができる（なお、著者が試みたこの再解釈の「形式化」においてはさらに精緻化の余地が認められたが、これによって再解釈の価値が損なわれることはないと考えられる）。

しかし本研究の意義は、単に哲学的な再解釈に成功したという点にあるのではない。著者はさらに、バークリーにおける視空間と触覚空間の独立性の仮定（およびその異質空間の共在性から時間秩序が導かれるという考え方）が、「ローレンツ収縮の実在性」という現代物理学の未解決課題（これまで曖昧にされてきた課題）に一つの分析的視点を与えるものであることを、説得力をもって論じた。この問題は延いては、量子力学と相対性理論の統一という課題（特にループ量子重力理論の目論見）に直結する重要な問題であり、著者は物理学の先端的問題に取り組む上での一つの有益な枠組みを、哲学の歴史的考察から導き出したと言える。

すなわち著者は、本研究において歴史的な哲学的議論の再解釈を行うとともに、その成果を現代的な物理学の理論的問題に適用してこれに資する議論を行っており、真に「科学哲学」の名に値する研究を高いレベルで行ったものと言える。

以上より、著者は、北海道大学博士（理学）の学位を授与される資格あるものと認める。